

4 7

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
なかにし くにお 中西 都夫	男 性	7 3 歳	7 歳	一 鍬 田

清水野国民学校 2 年生

① 8 月 1 5 日は、どこでどんなことをしていましたか。

じたく
自宅にいたはずです。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

おきな
幼かったのでよく覚えていません。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

何も感じなかったと思います。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

こうしやう 「海軍工廠で 1 3 歳の兄が……」
さい



はぐし ▲爆死された 英 さん すぐる

私は 8 人兄弟の次男です。兄が海軍工廠で亡くなったことは、本当にショックでした。とても優しい兄で、幼かった私をよく遊んでくれました。しかし、不思議なことに亡くなった時のことは全く覚えていないのです。兄が急に消えてしまった、という感じでした。おそらく、両親が私にショックを与えまいと、あまり話さないようにしていたのだと思います。兄の二つ年下の姉が当時のことをよく覚えており、手紙に書いてくれましたので紹介します。

○ 姉の手紙より（豊川市小坂井町在住）
こざかい

兄の英が中学 2 年生の時でした。学業半ばで豊川海軍工廠へ学徒動員で行き、昭和 2 0 年 8 月 7 日、空爆によって命を絶たれました。

兄は、一鍬田から豊橋二中まで自転車で通学していました。小柄だった兄は、まだ足が十分とどかない自転車に下駄をはいて乗っていました。豊橋まで通うのは大変そうで、寒い時はかわいそうに思いました。1 年生の時は何とか授業ができたものの、物資が不足し、まともな教科書もなく、勉強好きの兄はとても悲しがっていました。2 年生になると勉強どころではなくなりました。戦況はますます苦しくなり、兄は海軍工廠の機銃部に動員*1 されることになりました。

着る物も食べる物も満足にありませんでしたが、それでも兄たちは「日本は勝つ」、「日本を守る」という信念だけで耐えていたように思います。昼の食事で、ごはんにはイナゴがまるごと入っていることがあり、どうしてもものを通らなかつたと話していたことがあります。私たちの家は家族が多く、弁当を持たせる余裕はなかったのです。兄が亡くなった後、母は「自分は食べなくても、弁当を持たせてやればよかった。」と、悔やんで泣いていました。

工廠では、何度も B 2 9 が飛来するようになり、たびたび工廠の外へ避難していたそうでしたが、その日に限って防空壕の中に入ったようです。雨のように降

*1 P－8 4－参照 豊橋第二中学校からは 2 年生が 2 1 0 名が動員された。

りそそぐ爆弾が防空壕を直撃し、胴体は真っ二つになり、即死だったようです。

夜、学校の仕事から帰った父は、背負い紐を持ち、「おぶってでも連れて帰る。」と言って出かけました。しかし、夜のことであり、大勢の人が折り重なって死んでいて、兄を見つけ出すことはできず、むなしく帰ってきました。山の方へ逃げたかもしれないと、かすかな望みをいだきながら……。

翌日、英といっしょにいた豊橋二中の学友と豊川の叔母がさがしに行ってくれました。門を一步入ると、真っ黒に焦げ、男女の区別もつかない死体が重なっていたそうです。手足がちぎれてバラバラになったものも多く、とても正視できない、地獄のようなありさまだったと言っていました。異様なにおいがただよう中、トラックやリヤカーで死体が運ばれていたそうです。

学友が、防空壕の場所を教えてくださいました。叔母は、くずれた防空壕の中で折り重なった死体の中から、胴体が二つにちぎれた兄を見つけました。血のついた雑のう*1に「豊二中 中西英」の名前を確認しました。あまりに変わり果てた姿に、叔母はぼう然とするばかりだったそうです。悲しいことに、兄を連れて帰ることはできませんでした。亡くなった人は全員、千両の山の中に穴を掘って葬られたそうです。だから、兄の遺骨はありませんでした。雑のうだけを一畝田のお墓の中に納めました。父は、「英は、国のためにりっぱに死んだんだ。」と悲しみを押し殺していましたが、母は肩をふるわせて泣いていました。母は、終戦になってからも兄を思い出すのか、小さい弟を抱きながら泣いているのを何度か見ました。国のために死ぬんだと言っていた兄でしたが、こんな形で最後を迎えるとは、本当にかわいそうでした。苦しい時代に生まれ、青春も知らないで死んでいった兄を思い、句を作りました。

『将来に大きな夢を持ち 勉学を絶たれし兄の無念さ思う』

『工廠の爆撃の様まざまざと 中2の亡兄の面影を追う』

未来のある若者の命を奪って、家族を悲しませ、それぞれの人生を狂わせてしまうような戦戦は、二度とあってはなりません。

(写真提供：桜ヶ丘ミュージアム)



▲ 空襲前の豊川海軍工廠 左すみには防空壕が見えます

*1 小型のショルダーバッグのような布袋で、身の回りのこまごました物を入れるのに使用された。